

つながる・つなぐ教員研修の記録

—ナカマとつながる、ホンモノとつなぐ研修講座の運営を通して—

茨城県教育研修センター教科教育課 篠崎 智典

Record of teacher training to connect

— Through the training courses that connect with each other and experts —

SHINOZAKI tomonori

【要旨】

『令和の日本型学校教育』構築を目指して（答申）」では、従来の日本型学校教育の発展と「令和の日本型学校教育」の実現が求められ、さらにそれらを担う教師の姿が示されている。本実践では、この教師の姿を実現する教員研修として「つながり」をコンセプトに、研修の計画・運営を進めた。「つながり」を三つのタイプに分類し、ICTを効果的に活用しながら、その分類に沿ってSDGs及び法教育についての教員研修を行った。

キーワード： つながり、教員研修、ICTの活用、SDGs、法教育

1 はじめに

社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」や新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」の到来といわれる昨今、学校には必要な改革を躊躇なく進めることで、従来の日本型学校教育を発展させ、「令和の日本型学校教育」を実現することが求められている。

そのような中で、『令和の日本型学校教育』構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」では以下のように「令和の日本型学校教育」を担う教師の姿を示している。

- ① 環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている。
- ② 子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。
- ③ 子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。

社会の変化を踏まえ、学校教育や教師の姿が改めて見直されたことにより、教員研修の在り方についても見直す必要がある。本記録は、上記の答申の内容を踏まえながら研修の改善を進める中で、「つながり」をキーワードに計画・運営した、令和4年度の教員研修について、その内容を残したものである。

2 研修構築の基本理念

(1) 「つながり」を生かした教員研修について

志水（2017）は、ロシアの心理学者ウィゴツキーの「学びは人と人の間で起こる」という言葉を用いながら、学びの中での「つながり」の重要性について説いており、「学び」と「かかわり」は不可分なものとしている。志水は、「つながり」を子供たちの学びや学校づくりに生かすことを提唱しているが、本実践では、この「つながり」を教員研修に生かすというコンセプトで、研修の計画・運営を進めた。

(2) 三つのタイプの「つながり」

志水は、「つながり」の力を「社会関係資本」（social capital）や「人間関係が生み出す力」と定義付けながら、それらを以下の三つのタイプに分類している。

① 「きずな型」（bonding）

ある集団や組織内での「つながり」に言及するもの。学校でいうと「教師と子供のつながり」、「子供同士のつながり」などが該当する。

② 「架け橋型」（bridging）

ある集団や組織と外部との「つながり」を示すもの。学校でいうと「学校と地域のつながり」、「他の学校とのつながり」などが該当する。

③ 「結合型」（linking）

ある集団や組織と外部のエキスパート・専門機関との「つながり」に言及するもの。学校でいうと「大学（教員）とのつながり」が該当する。

本実践では、上記の三つのタイプの「つながり」の視点を取り入れて、つながる・つなぐ教員研修の計画・運営を進める。教員研修に置き換えると①は、教員同士のつながり、つまり「ナカマとつながる」と捉えられる。また②③は外部の組織やエキスパートとのつながり、つまり「ホンモノとつなぐ」と捉えられる。「人と人との『つながり』なくしては、人は決して育たない」という志水の言葉を教員研修に転移させ、「ナカマとつながる、ホンモノとつなぐ」の中で「令和の日本型学校教育」を担う教師の資質・能力の向上を図る。

(3) ICTの活用

GIGAスクール構想の進展や新型コロナウイルスの感染拡大への対応等、教員を取り巻く環境の変化を踏まえ、本実践ではICTを活用した教員研修を進めていく。ICTの活用は、自由な時間につながるができる「時間」や世界中どこでもつながることができる「空間」、通常だと知り合う機会のない人ともつながる「関係性」など、様々な面で効果が期待できる。対面での「つながり」が制限されている今こそ、その効果を十分に発揮できるよう活用していくべきと考える。

3 つながる・つなぐ教員研修の記録

(1) 「きずな型」でつながる教員研修

① 計画

本実践では、ある集団や組織内での「つながり」を生かす研修を「きずな型」と捉える。受講者（社会、地理歴史、公民科教員）のネットワーク構築を図るために、クラウドサービス（Google Workspace）を活用する。このクラウドサービスは、県内の県立・市町村立学校のほとんどの教職員が利用できるため、より多くの教員が参加できる。これにより、大きな「つながり」を作り出す情報共有ネットワークの構築を図り、「ナカマとつながる」を実現していきたい。

② 講座運営の記録

ア 学習支援ソフト（Google Classroom）を活用した、情報共有ネットワーク「社会の部屋」の作成

資料1は学習支援ソフト（Google Classroom）で作成した「社会の部屋」のストリーム画面である。このクラスルームは、社会、地理歴史、公民科の研修を受講した教員を中心に案内した。参加は任意として、周囲の教員にも情報を広げてよいことにした。このクラスルームでは定期的に教科の授業づくりに関する情報提供を行った。具体的に提供した情報は、以下の通りである。

- 研修センターの希望研修や公開講義の案内
- 社会科の授業で使える「社会科オンライン共有リスト」
- 社会科に関する研究発表会や講演会、セミナー等の情報提供

資料1 学習支援ソフト（Google Classroom）で作成した「社会の部屋」のストリーム画面



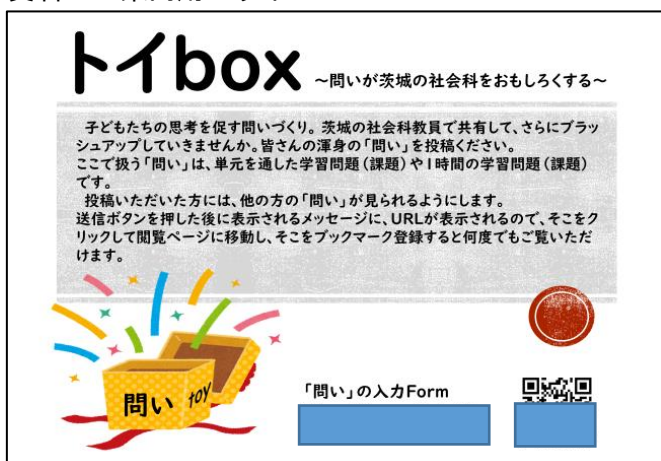
イ アンケート作成ソフト（Forms）と表計算ソフト（スプレッドシート）を活用した問
いの共有システム「トイ box」の作成

県内の教員が、社会、地理歴史、公民科における問い（学習問題、学習課題）を共
有できるシステム「トイ box」を作成した。このシステムは、「どのような問いが、児
童生徒をドキドキ、ワクワクさせるのか、様々な先生の問いを聞いてみたい」という
受講者の声を基にして開発した。資料 2 は案内用スライドである。社会、地理歴史、
公民科に関する研修の受講者に、このスライドを配付して、問いの提供を呼び掛けた。
資料 3 は問いの入力 Form である。ここには以下の内容を入力することとした。

- ・ カテゴリー：実践学年、分野（科目）等
- ・ 単元名
- ・ 問いの種類：「単元を貫く問い」又は「1 単位時間の問い」
- ・ 問いの内容
- ・ 児童生徒が問いをもつために使う資料や活動
- ・ 資料が掲載されている URL
- ・ イニシャル、ニックネーム等

資料 4 (p. 5) は共有用スプレッドシートである。入力 Form で回答した上記のよう
な内容が、共有用スプレッドシート内にカテゴリー別に表示されるようになっている。
問いを提供した教員には、共有用スプレッドシートの URL が知られるので、問い
が集約された共有用スプレッドシートをいつでも自由に閲覧できるようになる。

資料 2 案内用スライド



資料 3 問いの入力 Form

(2) 「架け橋型」でつながる教員研修

① 計画

本実践では、ある集団や組織と外部との「つながり」を生かす教員研修を「架け橋型」と捉える。受講者が外部とつながるために、ウェブ会議システム（Zoom）を活用する。オンラインでの接続ならば、いつでも世界中どこでもつながることができる「空間」に作用することができる。その特性を利用して、海外とオンラインでつながり、リアルタイムで持続可能な社会の実現について学ぶ「SDGs オンライン・スタディー」を計画した。まず、「NITS・教職大学院等 コラボ研修プログラム支援事業」として、独立行政法人教職員支援機構の支援を得て実施する。さらに、海外とオンラインで接続するために、海外で活動する認定NPO法人CFFジャパンやJICA筑波と連携する。現地スタッフともウェブ会議システム（Zoom）を活用して打ち合わせを重ね、「つながり」を生かして学びがより深まるような研修を目指す。

② 講座運営の記録

ア 事前視聴動画「SDGs 達成に向けたグローバルな学び」のオンデマンド配信

常磐大学・常磐短期大学 富田 敬子学長を講師に迎え、全4回の研修のイントロダクションとして、SDGsの理念とグローバルな学びの必要性について講義いただき、撮影した動画をオンデマンド配信して受講者が視聴できるようにした。資料5は、事前視聴動画の様子である。対話を取り入れた講義内容にして、受講者が問いをもちながら視聴できるように工夫した。

資料5 事前視聴動画の様子



イ 第1回SDGs オンライン・スタディー「マレーシアとつながり考える福祉、教育」

認定NPO法人CFFジャパンの国内スタッフと国外スタッフを講師に迎え、マレーシアの福祉施設「子どもの家」とオンラインでつながり、マレーシアの教育や福祉の現状について学んだ。資料6は、マレーシアの果物の紹介をしている様子である。リアルタイムで人々の生活に触れることで、現地の社会的な課題を直に感じ、深く考える様子が見られた。

資料6 果物の紹介をしている様子



ウ 第2回SDGs オンライン・スタディー「マレーシアとつながり考える環境」

第1回同様、CFFジャパンの協力により、マレーシアの市場とオンラインでつながり、パーム油の栽培などの話題を基に、マレーシアの環境の現状について学んだ。資料7は、マレーシアの市場の案内をしている様子である。市場の様子を基に、どうすれば環境問題を自分のこととして捉えられるかについて深く考える様子が見られた。

資料7 市場の案内をしている様子



エ 第3回SDGs オンライン・スタディー「イランとつながり考える平和」

JICAイラン事務所長を講師に迎え、中東の現状や、現地の様子について学んだ。資料8はJICA職員によるイラン文化の紹介の様子である。現地の様子について、講義いただく中で各受講者が問いをもち、参加者同士で対話することで、自分なりの考えを再構成できている様子が見られた。

資料8 JICA職員によるイラン文化の紹介



オ 第4回SDGs オンライン・スタディー「パラオとつながり考える教育」

JICAパラオ事務所 青年海外協力隊員を講師に迎え、パラオの学校とオンラインでつながり、パラオの学校教育の特徴や課題を学んだ。資料9は、パラオの授業参観と校長との対話の様子である。子供たちの様子だけではなく、校長先生に直接お話しただけで、現地の教育の課題が複雑なことを受講者は再認識しているようであった。

資料9 パラオの授業参観と校長との対話



③ 成果

- ・119人（延人数）がオンライン研修に参加した。
- ・現地とリアルタイムでつながることで、現地の課題を直に感じ取り、持続可能な視点での解決について深く考える受講者の姿が見られた。

④ 課題

- ・接続する国によっては、オンラインの接続や電力の供給が不安定な場合も多い。予め予備の動画を用意するなど、様々なアクシデントを想定しておく必要がある。

(3) 「結合型」でつながる教員研修

① 計画

本実践では、ある集団や組織と外部のエキスパート・専門機関との「つながり」を生かす教員研修を「結合型」と捉える。受講者が外部のエキスパートとつながる機会を設定するために、研修の中にエキスパートがかかわるような体験的な活動を取り入れる。今回は、法教育に関する研修の中で、エキスパートとして法曹三者（検察官、裁判官、弁護士）とつながり研修を計画した。さらに、法教育における体験的な活動を行うため、法務省の協力を得て模擬裁判を取り入れた実践を考えた。

② 講座運営の記録

ア 模擬裁判を体験する研修「シティズンシップ教育を取り入れた授業の実践」

市民性を育む！シティズンシップ研修講座において、水戸地方検察庁検事を講師に迎え、模擬裁判を体験する研修を実施した。資料 10 は、模擬裁判と体験後の協議の様子である。模擬裁判の体験に加え、実際の授業に取り入れるために配慮すべきことなど話し合い、実際に検事に質問する場面を設定した。エキスパートとのつながりの中で、より専門的な知識や、概念的な知識を獲得することができていた。

資料 10 模擬裁判と体験後の協議の様子



イ 対話を通して法教育を理解する「社会科における法教育の充実」

新規採用教員〔初任者〕研修講座（中学校、社会）において、茨城県弁護士会員を講師に迎え、法教育の充実についての研修を行った。資料 11 は、法教育についての講義と受講者の対話の様子である。弁護士から課される、答えのない問いについて対話を重ねることで、公民として法やルールに基づきながら考察して、よりよい社会を構築していくことの大切さについて、学ぶ姿が見られた。

資料 11 法教育についての講義と受講者の対話の様子



ウ 模擬裁判を体験する研修「地理歴史、公民科における法教育の充実」

新規採用教員〔初任者〕研修講座（高等学校、地理歴史、公民）において、水戸地方裁判所判事を講師に迎え、模擬裁判を体験する研修を実施した。資料 12 は、模擬裁判と判決を考える様子である。実際の裁判の流れを確認しながら、判決を考えることで、法的な視点で自己の考えを深めることの大切さを再確認していた。

資料 12 模擬裁判と判決を考える様子



③ 成果

- ・法曹三者とつながり、直接エキスパートから講義いただくことで、法教育の本質について受講者の理解が深まった。
- ・茨城県弁護士会の出前授業や水戸地方検察庁の法教育研修、水戸司法裁判所の傍聴など、法教育に関して学校外の期間（エキスパート）とつながって授業づくりができることを初任者の段階で知ることができた。今後の教科指導の中で、生かされる経験だと思われる。

④ 課題

- ・法務省が調整を担当してくれていたが、このつながりを持続していくためには、ハブとして法曹三者の調整に入る当センターの役割が大きい。
- ・エキスパートの知識や経験を教員に伝えるには、事前に綿密な打ち合わせが必要である。さらに、学校の児童生徒に落とし込むには、言葉や内容の精選などにも必要である。

4 おわりに

『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）」が令和 4 年 1 2 月 1 9 日に出された。ここでは、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成のためには、「教師一人一人の専門性の向上と、多様な専門性・背景を有する人材の取り込みにより、教職員集団の多様性を確保し、学校組織のレジリエンス（復元力、立ち直る力）の向上」が必要と示している。専門性の向上や多様性の確保という点では、学校や教員が閉ざされた環境ではなく、広く外部とつながる必要がある。「きずな型」や「架け橋型」、「結合型」によるつながりを生かした教員研修を、今後も balan

スよく実施していくことで、「令和の日本型学校教育」を担う教師の姿に近づいていくのではないかと考えられる。

今回の実践では、つながりを生かした教員研修を計画・運営するにあたり、私自身のつながりの大切さを実感した。例えば、「トイ box」の運用については、以前から一緒に学んできた社会科教員の仲間たちの意見に助けられた。また、「法教育」の研修では、長く法教育に携わってきた猪瀬宝裕所長のアドバイス無くしては実現しなかった。改めて感謝申し上げたい。今後も「学びは人と人の間で起こる」という言葉を大切にしつつ、教員の豊かな学びについて追究していきたい。

<引用文献・参考文献>

- ・中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』 2021 年 1 月
- ・中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』を担う 教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）』 2022 年 12 月
- ・志水宏吉・若槻健『『つながり』を生かした学校づくり』東洋館出版社 2017 年 3 月